

# 学 年 通 信 号 外

平成23年7月21日

明秀学園日立高等学校 第3学年



盛夏の候、皆様方にはいよいよご清栄のこととお喜び申し上げます。  
明秀日立生(白梅)の諸君。「明るく・清く・凛々しく」の建学の精神に照らし合わせ、それに適うよう日々を過ごしていますか。白梅への道標である校訓を日々実践していますか。「やるからやる気が出る」を実感していますか。そして、挨拶や手伝いを習慣化していますか。

諸君の中には高校生活を掛けて取り組んできた課題にひとつの終止符を打った人もいます。諸君がそうであったように、多くの者は勝利によって有終の美を飾ることがありません。しかし、勝敗は一つの結果であり、それ自体に大した意味はありません。これは決して負け惜しみの心象ではありません。大切なのは、やはりその後の振る舞いであり、そこに真の勝者と敗者の分かれ道があります。

『光陰矢の如し。少年老いやすく学成り難し』諸君！思索にふけり、垣根を越えよ。

## 悔しさのただ中にいる諸氏へ告ぐ

試合中はただただ勝ちたいという思いしかない。これっぽっちの打算も負けることも頭には過(よぎ)らない。これまでの苦労も辛かったことも、悲しかったことも、うれしかったことも、これまでの悔しさも、謝罪の思いも、感謝の思いも、誰かの言葉も何一つ遮るものはない。あるのはただ勝ちたいという思いだけだ。勝ちたいという一心で、ひたすら勝利のみを追い求めた。何という充実した時間だろう。これほどまでに濃密で純粋な時間を持ち得た諸君に与えられたものは、しかし敗戦という極めつきの悔しさである。ただし、それは誰にでも与えられるものではない。極めつきに得難い悔しさであり、それだけに何物にも代えがたい悔しさだ。悔しさの分だけ諸君の手には目に見えない宝物が握りしめられているはずだ。

「艱難汝を玉にす」

艱難(かんなん・・苦しいことやつらいこと)、汝(なんじ・・あなた)、玉(たま・・すばらしい物)。「人間は苦労を乗り越えていくことで玉が磨かれるように人格が練磨され、立派な人間になるという意味。」

もし、いまだに悔しさの中に佇(たたず)み、「あの時こうしていれば」だとか「もっとこうしていれば」だとか、他人のせいになしたり、例えば審判のせいになしたりするようでは、諸君は「玉」になり損ねてしまいます。悔しさは目を追うにつれ薄まってしまうでしょうが、手にした宝物を手放さないためには、いわゆる「悔しさをバネにして」乗り越えなければなりません。乗り越えるものは勿論『壁』です。目標に到達できなかった諸君の前には『先の見通しがきかない』という壁が立ちはだかっています。だから、悔しさのバネを使ってその壁をピョーンと飛び越えてしまえばいい。悔しさの分だけその反動は大きく、高い障害をも飛び越えることができるでしょう。

その先に現れる曠然(こうぜん)とした景色の中に、諸君の進むべき路(みち)が伸びています。

### —余談—

私の高校時代は、山の一言に尽きます。山岳部に所属し、時間さえあれば近場の山(霧島連峰)に登っていました。山岳部にも大会はあって、体力、技術、知識が3泊4日の山中生活で競われます。

部員は同学年でパーティー(四人で構成)を組めないほど少なく、想像に難くないでしょうが、何をやっても周囲からは奇異な目で見られてしまう部活でした。

顧問の川口靖文先生と一緒に山を歩くことができたのは、補助員として参加した九州大会の一度だけでした。修学旅行と日程がかち合っていたのですが、「お前は修学旅行には行かないんだろう？」と大会に誘われ、二つ返事で山に行くことを選択しました。私の目の前を登りながら鼻先で平然とオナラをし、「山本、人前では遠慮しろ」と冗談を言うような一面も持つ方でしたが、こいつなら修学旅行を袖にしても山に登るだろうと見込んでくれていたことに感激したのを覚えています。この大会は、私自身が競技の対象ではないことから山行きを満喫でき、山に登る行為を哲学し、岳人を観察することができた貴重な体験となりました。

入部の際も強引でした。私が軽い気持ちで「山岳部」と言ったのをどこかから聞きつけ、職員室に呼びつけると、有無を言わせぬ勧誘で、入部せざるを得ない状況に追い込んでしまいました。結局、入部した新入生は私一人でした。2年生は二人いましたが練習には殆どで出てこず、インターハイに出場した3年生が引退してから、ひょっこり顔を出すようになりました。この一つ上の先輩とはそりが合わず、退部届を出しに行った時は、「成績が落ちたから」という退部理由を聞くなり「言い訳するな」の一言で突っ返されてしまいました。

最後の県大会を前に急造のパーティーを結成しました。今となっては何をそこまでして大会出場に固執したのか不明です。見栄や意地みたいなものだったかもしれません。結果は惨憺たるものでした。登山初日、2年生がバテて、棄権することになりました。2年生を下山させ、残りの行程を歩きましたが、一人でも棄権すると競技の採点対象から除外されることがわかっていましたので、私は失意の中を正にさ迷うように歩いていたように思います。順位も何も付きません。これは何より厳しい結果です。翌日の行程で今度は私が歩けなくなりました。大会に参加する意味を失った私は、歩く意欲を完璧に失っていたので、それが如実に現れたのです。今振り返っても若い頃というのは心と体が直結しているのだと思います。

引率して下さった新任の顧問の先生からは、「お前の我儘で、みんなを振り回した挙句、このザマは何だ」と言われました。こう言われるのもっともなことです。顔に濡れタオルをかぶせ麓の公民館の板間に仰向けに寝転がっていました。山に戻ってきた鶯が盛んにさえずり、山間(やまあい)にこだましていました。これまでのことを振り返って、空しさと恥ずかしさと周囲に合わせる顔の無さと、そんないろんな思いがないまぜになって、このまま山に深く入り込み姿を消してしまおう、地元に戻るのには止そうと真剣に考えたことを覚えています。

恩師の川口靖文先生は、情けない面(つら)を下げて大会の報告をしに来た私に、開口一番「山がそんなに甘くないということがわかっただろう」と言われました。続けて「お前には勉強があるじゃないか」と。この言葉に私は救われました。もうずいぶん昔のことだからよく覚えていませんが、この時私は先生の前で泣いていたかもしれません。

私が失意の中にいたのは、打算があったからです。そりの合わなかった先輩を見返したい。これまでやってきたことを無駄にしたくない。結果も欲しい(今なら、AOや推薦に有利ですね)。あるいは気分よく区切りをつけたい。こんなことだったのではないかと思います。今にして思えばこんなことですが、当時の私にはとても大事なことだったのだと思います。登山を競技することに当初から批判的だった私が、大会参加に駆り立てられることになるのですから、人の心、特に若いうちの心は本人にも分からない不思議なものです。

山に登るといふ行為からして、この時の私は不純でした。登山を競技することに関し、批判的立場を貫く信念があったなら、採点の対象にならなくなるや私は嬉々として山を登っていたはずです。こうして私の打算はもの見事に打ち砕かれ、強烈なしっぺ返しを食らうことになりました。

だから、何の打算もなくただ勝ちたい一心で競い合った諸君に私は敬意を払います。そして、労いに贈る言葉は、勿論「諸君には勉強があるじゃないか」の一言です。

### —勝者であれ—

努力の結末が失敗となることを恐れるあまり努力することに身が入らなかつたり、負けたら負けたことを言い訳できるように逃げ道をつくっていたり、どうせダメだと初めから挑戦すらしないのは「敗者の行い」です。

今も失意の中において元気の出ない者、先の見通しがきかない者がいるなら、その人たちは形(なり)振り構わず勉強する他ない。諸君にこそ「勉強しか」ありません。勉強は身を助ける。この夏、最大限の努力をしよう。

失敗を繰り返した先に成功があります。失敗は成功のもと。失敗は成功の母。失敗を疎まず、失敗に親しめ。失敗を蔑(さげす)まず、敬え。失敗を悔やまず、喜べ。いかにも勝者の振る舞いである。